

通称「^{たつやまいし}竜山石」を使用しました。また、東塔は遺構^{いこう}の上に保護土をおいて、基壇を復元しています。上面には花崗岩の礎石を旧位置に新たに置きました。西塔は南階段を実物表示し、基壇をもとの高さにあわせて復元しています。このため、南側は基礎から上面までありますが、遺構の残る北側では上部のみの復元になっています。上面の花崗岩は柱のもとの位置を示しています。



南の堀跡

堀跡

金堂や塔などの主要建物を囲む施設は、南では幅2mの溝とこれと並行する柱穴列から、9～10世紀頃には掘立柱塼^{ほったてばしらべい}が作られていたようです。西は尾根を利用していたと考えられます。北については地山の自然地形や砂に埋もれた土盛りから、また東では幅2mで並行する南北溝から築地塼^{ついでべい}が作られていたと考えられます。これらによる範囲は南北約90m東西約140mとなります。



中世本堂の礎石

中世本堂

建物は柱の配置から5間×5間の規模が復原できます。柱と柱の中心間隔は1.8mです。建物中央奥では間隔を3mと広くとっていて、ここに本尊を安置していたと考えられます。礎石は大きいもので長さ1.5mをこえ、柱座を削りだしています。1段低くけずり落とした所はほかと比べてノミ跡が粗く、奈良時代の礎石をこの建物に転用した時の再加工と考えられます。

建物跡の北辺と西辺には幅1.5m深さ30cmの雨落ち溝が残っていて、15世紀頃の瓦がたくさん埋まっていました。「文明八年」(1476)と銘のある瓦も、この溝から出土しました。「文明八年」は建立の年代と考えられます。

整備にあたって、発掘調査で出土した遊離礎石を北東隅に置き直しました。



賞田廃寺跡の位置

おもな出土物

主な遺物は、飛鳥から中世まで各時代の瓦、「上道」とへら書きされた丸瓦、鷓尾、風鐸、瓦塔、瓦経、円面硯、中国製磁器、東西両塔の規格と異なる凝灰岩製基壇外装石などがあります。

【交通】

宇野バス^{しのごぞ}四御神行き「脇田」下車すぐ

発行：平成26年3月31日

〒700-8544

岡山市北区大供一丁目1-1

岡山市教育委員会（文化財課）

TEL 086-803-1611

国指定史跡

しょうだはいじあと 賞田廃寺跡



西塔東階段と外周列石

岡山市教育委員会



賞田廃寺跡の概要

賞田廃寺は、岡山市中区賞田の竜ノ口山塊の南裾部に建てられた、岡山県でも最古の古代寺院の一つです。上道氏の墓とされる唐人塚古墳が西の尾根をはさんで相接して営まれています。

戦前から、白鳳時代や奈良時代の瓦が出土する古代寺院跡として広く知られていました。昭和45年の発掘調査によって金堂・東塔・西塔などの一部が発見され、およそ1町(110m)四方の寺域であることなどがわかりました。東塔と西塔には地方ではごくまれな凝灰岩壇正積基壇が用いられていることなどが明らかとなり、昭和47年3月に国史跡に指定されました。

平成13～16・18年の史跡整備に伴う発掘調査では金堂・塔及びそれらを囲む施設、工房、室町時代になって新たに建てられた中世本堂などが明らかとなりました。講堂や回廊・門のほか、僧房や食堂などの諸施設はわかっていません。

創建時の施設は見つかっていませんが、軒瓦の出土が少ないので、小堂のような建物であったろうと考えられています。白鳳時代には金堂が建てられます。奈良時代にはお寺の大整備が図られました。この時期に建てられた東・西塔の中間の軸線が、金堂の中軸線から西へ12.5mずれていることから主要建物群の配置計画に変更が加えられ



創建時の軒丸瓦1



創建時の軒丸瓦2



金堂の礎石と瓦溜まり

たようです。東西の塔に採用された凝灰岩壇正積基壇は、畿内の有力寺院や宮殿で用いられる格式の高い型式です。この時がお寺としての隆盛を誇った時期でした。その後衰退していき、14世紀には最後に残った金堂が焼け落ちてしまいました。そして、100年あまり後の15世紀後半に中世本堂が新しく建てられました。

金堂

金堂基壇は、南側がすでに削られています。東西15.5m南北12.6mに復元できます。礎石や抜き取り穴から、建物は東西5間南北4間の柱間で、柱と柱の中心間隔は2.4mであったことがわかりました。基壇のまわりは13世紀に基壇上面からおおよそ1.5mの深さまで掘り下げられました。14世紀には火災によって焼失したと考えられます。

金堂の周りからはたくさんの瓦が出土しました。ほとんどは白鳳時代の瓦で、わずかに奈良時代や中世の瓦が見つかっています。金堂は白鳳期に建立されてから14世紀まで修理を受けながらも古来の姿をとどめていたようです。

整備では、現存する唯一の礎石を実物展示し、不足は新たに作った礎石や近隣の安養寺や高島小学校にあった礎石を置いています。また、本来の基壇外装がわからないので、芝張りにしています。

東塔・西塔

東塔は、凝灰岩壇正積の一辺約12.1m四方の基壇で、階段が東西二方向につきます。中世には大きく破壊されて、現在は基壇の基底部しか残っていませんが、保存の良好な東階段をもとに計算すると、基壇の高さはおおよそ78cmに復元できます。東塔と西塔では同じ型式の軒瓦がふかれていましたが、瓦の製作時に付いた傷や製作技法から東塔が先に西塔が後から建てられたことがわかりました。

西塔は基壇の外周を列石で囲った珍しい形態です。基壇は、一辺約10.8m四方の凝灰岩壇正積で、西辺の北半分と東階段の基底部のみが残っています。階段は東西二面です。東階段から復元すると基壇の高さは約90cmになります。

外周列石は一辺約16m四方で、北・東・西は小振りな自然石を一段に、傾斜が低く寺の前面にもあたる南では他の三方よりも大振りな石を用い二段以上に積んでいます。南辺中央には幅3m奥行き1.5m、三段(後に一段を補い四段)の階段が取り付けます。

東西両塔の基壇の石材は、香川県火山産(さぬき市)の凝灰岩ですが、現在ではこの石が手に入らないので、整備では兵庫県産の凝灰岩、



金堂の軒瓦



東塔基壇北辺



東塔東階段



東塔と西塔の軒瓦1



東塔と西塔の軒瓦2



西塔外周列石南階段